

人権なら

2017年11月1日

第83号

NPO なら人権情報センター

● ひと・まち・生き生き

落語・漫才・浪曲を楽しむ

第38回水平社敬老会に高齢者が集う

第38回水平社敬老会が10月14日、川西町コスモ

スホール

であった。各支局から高齢者276人が参加。落語、

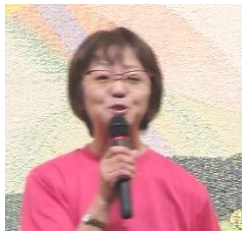


漫才、浪

曲の披露に大いに笑い、楽しいひとときを過ごした。

植村照子・理事長は「毎年、この催しを楽しみにしていただいていることを嬉しく

思う。今回も大いに楽しんで、元気をいっぱい持ち帰っていただきたい」とあいさつ。



演目のトップは桂米朝一門

の桂団朝(かつら・だんちょう)さんが落語を披露。話の落ちに「なるほど」と納得させ、観衆を爆笑させた。

真山一郎さんが「南部坂雪の別れ」を熱演

続いて、立山センター・オーバーさんが漫才を披露。センターさんは隣の斑鳩町の出身で、生駒高校を卒業したと自己紹介。親近感を感じさせ、笑わせた。

最後は、歌謡浪曲の真山一郎(まやま・いちろう)さんが登場。昨年に続いて、同じ忠臣蔵の演目から「南部坂雪の別れ」を熱演した。

昨年の演目は、大石内蔵助が吉良の討ち入りのために関白名代・立花左近と偽って江戸に下る道行きの宿で本物と遭遇する緊迫した場面と、実は浅野内匠頭の家臣、内蔵助だと知った立花左近が、自らが

偽りだとして謝罪。その場を取り繕う人情物語で、「大石内蔵助関白名代立花左近鳴海(なるみ)の宿」の一節だった。

今回は、いよいよ討ち入りの日が迫り、故・浅野内匠頭の奥方に最後の別れに訪れる一節だ。仇討ちの情報が漏れることを警戒して「仇討ちなど考えていない。地元で小間物屋でも始めようかと思っている」と偽り、奥方に罵られ、心苦しい中で最後のあいさつを交わすくだりを演じた。その熱演に会場は感動の渦に包まれ、大きな拍手が沸いた。

真山さんは歌謡曲も披露。手拍子が起こり、盛り上がった。真山さんの今回の演目については、問い合わせがくるほど、楽しみにしていた人が多くいた。

川口真由美・金洪仙2人会

「川口真由美・金洪仙(キム・ホンソン)ふたり会」が9月23日、大阪市であった。

主催は橋本康介さんが主宰する「アジュール空堀」。

金さんは、交流のあった彫刻家の金城実さん、



「ガジュマルの会」初代会長の玉城利則さん、喜納昌吉さんらとの写真や映像「大阪で出会ったくしまんちゅう」たちを見せながら、話をした。

川口さんはトークとライブ「海と空と丘に響け！東アジアの民の歌」。「ケサラ」など数曲を熱唱。この国を守るために/軍隊がなくては/ならないとしたら/軍隊がなくては/滅びていくとしたら/滅びていこうではないか/私たちは/どんなことがあっても/戦力は持たない/私たちは/なんと言われようと/戦争はしない。この歌「軟弱もの」がやけに胸に残った。

法隆寺界隈を探索

河合町人権学習講座でフィールドワーク

河合町人権学習講座が10月13日にあり、法隆寺界隈をフィールドワークした。テーマは「法隆寺郷被差別民―国符後声聞師と極楽寺穩亡」。コースは法隆寺 i センター―藤ノ木古墳(写真)―国符後声聞師集落跡(大殿村)―法隆寺西里(大工組集落)―ウォーナー顕彰碑―法隆寺境内―極楽寺郷墓(処刑場、隠亡集落跡、行基供養塔、大工頭中井正清一族の墓所)―男爵・北畠治房旧邸―法隆寺 i センター。案内は吉田栄治郎さん(天理大学講師)が務めた。



門前郷の西里は法隆寺組大工の居住地

藤ノ木古墳の名称は近年、地名を取って名付けられた。江戸時代は「陵山(みささぎやま)」と呼ばれた。天皇か皇后、あるいはそれに準じる天皇一族と考えられる。被葬者は穴穂部皇子と同母弟の崇峻天皇の2人説が有力。2人とも蘇我馬子に暗殺された。法隆寺は2人の「鎮魂の寺」だった可能性もあるという。

声聞師(しょうもじ)たちが住んだとされる大殿(おおとの)国符後(こうのうしろ)声聞師村の人々の活動などの話は面白かった。

西里は東里・本町の3つからなる法隆寺門前郷の1つで、法隆寺組大工の居住地。戦国時代に現在の大和高田市市場の万歳城に本拠を構えた万歳氏一族の中井氏が16世紀半ば、この地に移り住み、大工頭として活躍したとされる。



文化財救った「恩人」として建つ「ウォーナー碑」

西里から法隆寺の外壁に沿い、少し坂を登ると、ひ

っそりと「ウォーナー顕彰碑」が建っている=写真。アメリカ人ランドン・ウォーナー(1881~1955年)は太平洋戦争中、日本の保護すべき文化財を整理した「ウォーナーリスト」を作成。空襲から文化財を救った「恩人」とされ、碑が建った。が、後に疑問視された。

法隆寺境内では、「聖徳太子は存在したのか」「法隆寺の謎」「聖徳太子信仰」などをめぐって話を聞いた。梅原猛は著書『隠された十字架』(新潮社、1972年)で、聖徳太子の怨霊を鎮める「鎮魂の寺」だと記す。理由として、中門の柱が通常4本なのに5本ある。救世観音の顔が通常の仏像とはまったく違う。頭が釘で光背(仏身から発する光明をかたどった仏像の背後にある飾り)に打ち付けられている、をあげる。



極楽寺郷墓は法隆寺の寺僧の墓地が始まり

東里を抜けて極楽寺郷墓(=写真)へ。極楽寺郷墓は法隆寺の寺僧の墓地として始まった。平安から室町時代にかけては刑場になっていた。郷墓を管理したのは隠亡(おんぼ)と呼ばれる被差別民。三昧聖(さんまいひじり)とも言い、平安末期ごろから現れた。三昧は墓地、聖は半僧半俗の宗教者のことで、遺体処理に関わったため、強い賤視を受けた。他方で、遺体処理に伴う布施や医業への関与などで富を蓄積。江戸時代には医者数を数多く輩出した。



畿内の穩亡は奈良時代の行基の弟子・志阿弥の末裔伝承を持つ。聖武天皇・行基から与えられたとする由緒書や墓地支配の免許を持ち、墓地支配権と埋葬管理権を主張した。大和国には100ヵ所を越える穩亡集落があり、仲間組織をつくっていた。江戸時代には10戸あまりの法隆寺村枝郷極楽寺村があった。歴史とともに、「差別」を考えるうえで興味が尽きない。

平群谷をフィールドワーク

県民歴史講座で「まぐわ淵」などを巡る

第3回「県民歴史講座」が9月26日にあり、平群谷（へぐりだに）をフィールドワークした。テーマは「平群町北東部・中部の地域社会に学ぶ」。コースは近鉄東山駅－まぐわ淵－金勝寺－金勝寺墓地（槻原くしではら>墓地）－日待講燈籠（ひまちこうとうろう）－紀氏神社－蔵城薬師塚－吉備内親王墓－長屋王墓－近鉄平群駅。案内は県立同和問題関係史料センターの大西誠さん。



平群谷は奈良県の北西部にあり、東側の平群山（矢田丘陵）と西側の信貴生駒山系に挟まれた谷地形を指す。竜田川の中流域となる。東山駅から5分程歩くとまぐわ淵の景観が広がる＝写真。

ここは竜田川が西側へほぼ直角に曲がり込む。流れが急速に速くなり、淵に注ぎ込んでいる。農地を耕す牛馬に装着する鍬を洗ったとの言い伝えから「馬鍬淵」と表記されたという。雨乞い祈願として、牛の頭を投げ込む儀式も行われたとの伝承も。川沿いに南へ歩くと金勝寺＝写真。川を挟んで対岸に金勝寺墓地がある。



槻(しで)の木で制作したとされる薬師如来像

槻原山金勝寺は真言宗室生寺派の寺院。天平18年(746)に竜田川に潜伏する青髯龍王が白髪の老人と化し、行基菩薩を出迎えて現在の境内に案内。布教の拠点としたのが寺の由緒とされる。本尊は開祖の行基がこの地に密生していた槻の木の一霊木で制作したと伝わる薬師如来像。平安末期の作とされる。

本堂南西に磨崖仏群がある。五輪塔は鎌倉時代後期の作。寺伝では、「行基供養塔」とされている。

川を越え、坂を登ると金勝寺墓地が広がる。槻原・上庄・吉田・新家・西向・櫛原・梨本地区の郷墓だ。南入口には舟形十三仏板碑が建つ。北側には軸部に金剛界四仏の種子(しゅじ)が月輪の中に薬研彫りで刻まれる鎌倉時代後期の十三重層塔。中央の東屋内には行基1100年忌に当たる弘化5年(1848)作とされる供養塔もあり、三昧聖の活動が偲ばれる。

「日待講燈籠」に向かう。辺りに「紀氏神社」があったとされ、東西の道は河内から十三峠を経て松尾寺への参詣路だった。日待講は田植え、稲刈りの後や、正月・5月・9月の吉日夜に行われた「待ちごと」だ。



「双墓」は吉備内親王・長屋王夫妻の墓

100mほど南側に現在の「紀氏神社」がある。『延喜式』に記され、祭神は都久宿祢(つくのすくね)。『日本書紀』は都久[木菟]宿祢について、平群氏の祖先と記し、仁徳天皇から允恭(いんぎょう)天皇の治世に大臣(おおおみ)として活動した、とある。現在は、上庄、槻原、西向の3大字で宮郷を構成。拝殿の前庭を囲むように配される座小屋を持ち、10月の祭礼は3大字の座衆によって執り行われる。

「蔵城薬師塚」を通り抜けて、「吉備内親王墓」「長屋王墓」へ。天武天皇の孫、長屋王は奈良時代初期に左大臣として政権を担った。だが、勢力の伸長を図る藤原不比等の息子ら(四子)の策略で謀反の疑いをかけられ、神亀6年(729)2月に妻吉備内親王(草壁皇子の娘)と4人の息子とともに自死に追い込まれた(長屋王の変)。夫妻の屍は翌日、生駒の山に葬られたと『続日本紀』に記されている。宮内庁は明治34年(1901)、大字梨本の「双墓」を夫妻の墓と治定した。

「今の日本は黄信号」

アウシュビッツのガイド、中谷剛さんが指摘

10月6日付の毎日新聞に掲載された鈴木美穂記者の「アウシュビッツのガイド、中谷剛さんに聞く ヘイトとガス室は一本の線 『今の日本は黄信号』」の記事(=写真)が目にとまった。引用しながら、紹介する。

アウシュビッツは、ナチス・ドイツが第二次世界大戦中の1940年、占領下のポーランドで政治犯を収容するために開設。後にユダヤ人らを大量虐殺する「絶滅収容所」となった。130万人以上が連行され、ユダヤ人がその9割を占めた。

ナチス親衛隊の医師らはユダヤ人を「選別」し、労働できるか否か、を顔色を見て決めた。75～80%がすぐさまガス室に送られたという。

ドイツは第一次世界大戦に敗れ、多額の賠償金にあえぎ、世界大恐慌が追い打ちをかけた。社会荒廃が進む中で、裕福な人が多いと思われていたユダヤ人への妬み、積年の偏見が噴き出した。そこにナチス・ドイツが受け入れられる土壌が生まれた。

「当時の政治家は国民のこうした『反ユダヤ』感情を利用し、社会不安の要因をユダヤ人のせいにした。し

編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

総選挙の結果は自民党の圧勝だった。野党の乱立が手を貸したのだ。結果、立憲主義、民主主義を踏みにじってきた安倍政権が、これからも続くことになる。日米同盟の強化を唱え、対米従属・軍事強国路線を推進する。憲法9条の改悪、原発の再稼働、アベノミクスによる成長の追求…。安全保障や経済問題を巧みに持ち出し、新しいナショナリズムに引き込む。この国民総動員の動きに乗ってはいけない。これらに対抗するビジョンが必要だ。ポスト安倍の新しい方向を示す政治勢力の出現が待たれる。野党議員が少ないなか、市民の力を広く結集し、行動していくことが求められる。

かもこうした政治家ほど人気を集めた。常識から離れた『人間の優越性を髪や目の色で決める』という政策にブレーキがかけられなかったのは、国民の支持があったから。異を唱えた学者は主流派から外され、国民も『都合の悪い真実』に耳を貸さなくなった。衆愚政治の結果、アウシュビッツの悲劇は起きた。民主主義の恐ろしさ、その教訓は今にも通じています」



「ホロコーストの始まりは市井の人々が口にした『反ユダヤ』感情、ヘイトスピーチでした。それが時間をかけ、ガス室での虐殺につながった。ヘイトスピーチとガス室は『一本の線』で結ばれている。歴史を学ぶことは、私たちの国が今どこに位置しているかを知る『道具』となるのです」

中谷さんは、現在の日本は「黄色信号ではないか」と語る。ヘイトスピーチを伝えるニュースに心底驚いたのだ。原因は「教育に責任がある」と見る。「近代史、とりわけ20世紀の戦争についての知識が欠如している。歴史と現在は地続きで切り離せません。歴史に学び、教訓として未来に生かすことが必要なのです」

麻生太郎・副総理がナチスに学べ、というような暴言を吐いた。「僕は政治家の発言を許容する社会が気持ちが悪い」。日本では「歴史修正主義」の動きもある。中谷さんは「一人でも多くの人が歴史の現場に足を運び、自らが正しいと思う歴史を選ぶことが大切。私たちの選択は次世代の20年、30年先をも左右する。政治指導者の歴史観をうのみにするのではなく、自分自身で将来を引き受ける覚悟が重要」と語る。

ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター

〒636-0223

奈良県磯城郡田原本町鍵301-1

TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833

E-mail:info@nponara.or.jp

http://www.nponara.or.jp/